

特集 ● 調査結果で見る採用広報期間短縮の影響

くわばら
榎原 博之 ● (株)ディスコ キャリアリサーチ グループ長

一 はじめに

株式会社ディスコでは、高等教育機関の入試広報からキャリア教育、就職支援など入り口から出口までをサポートする事業、及び就職情報サイト「日経就職ナビ」(日本経済新聞社が主管、株式会社日経HRが企画・管理)の事務局運営、国内・海外で学ぶ学生のための就職イベント「Career Forum」などを通じて企業の人材採用・育成支援事業、人材紹介事業を行っている。採用・就職動向を把握するため、企業調査と学生調査を定期的を実施。学生調査は、毎年二千人の「日経就職ナビ 就職活動モニター」(以下、学生モニター)を組織し、定期的に定量的・定性的なアンケート調査を行っている。そこから見えた採用広報活動期間短縮の影響について触れていく。

なお学生モニターは、年度ごとのデータに偏りが生じない

よう、文部科学省の「学校基本調査」から地域分布や文理、男女比などを割り出してメンバーを構成している。したがって年度ごとの比較には適しているが、就職活動に熱心な学生たち中心で構成されており、活動量や内定率は高めになる傾向があることをご認識いただきたい。

二 十月～十一月は「学業・研究活動に励んだ」

例年であれば就職活動序盤だった「十月～十一月」をどう過ごしたかを学生モニターに尋ねた。複数回答の場合は、「就職活動の準備をした」(五七・九%)と「学業・研究活動に励んだ」(五七・五%)がトップに並び、単一回答の場合は、「学業・研究活動に励んだ」(二九・一%)に次いで「就職活動の準備をした」(二二・八%)となった(図1・2)。一般社団法人日本経済団体連合会の倫理憲章は、「就職活動の早期化が学業の妨げにならないよう」に配慮して見直されたわけで、



理系を中心に学業に時間を費やした学生が多かったという期待どおりの結果となっている。企業も採用広報期間短縮の初

年度ということもあり、十二月より前に採用を目的とした母集団形成をする動きはほとんど見られなかったと言える。

図1 10月～11月の過ごし方

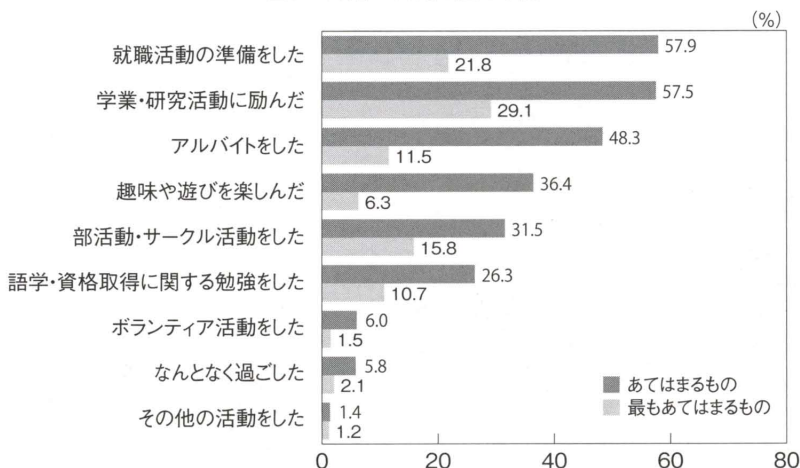
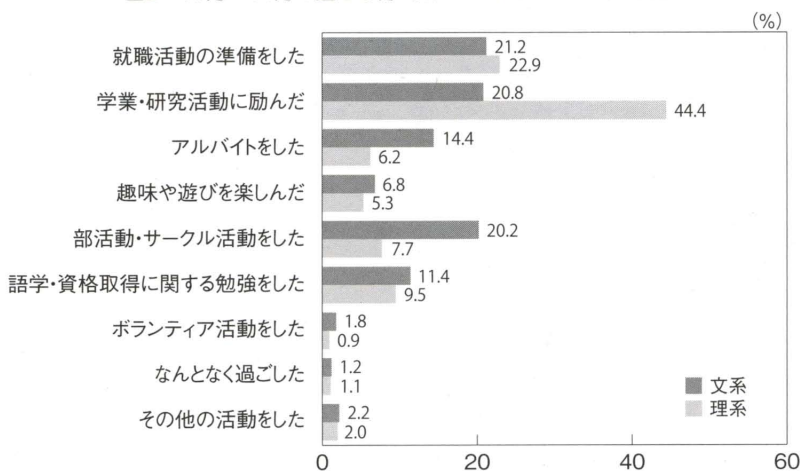


図2 10月～11月の過ごし方 (最もあてはまるもの/文理別)



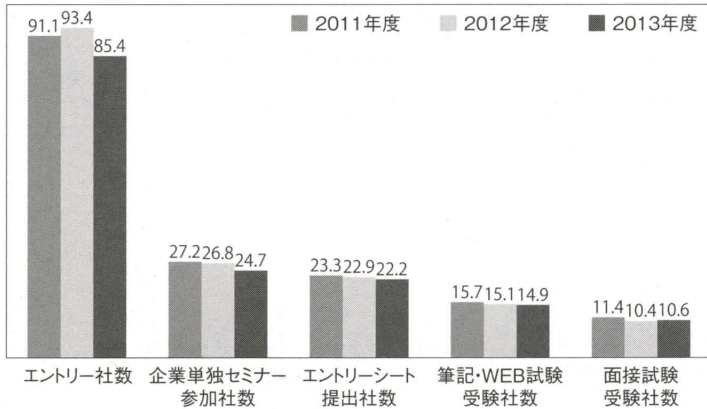
(資料出所)ディスコ「2013年度 日経就職ナビ 就職活動モニター調査」(2012年1月)

二〇一二年一月上旬に実施した学生モニター調査では、企業の採用広報開始が二カ月遅れたことによる自身への影響はどう働くかと思うかを尋ねた。日程の過密化や準備不足により自分に合った企業と出会うチャンスを減るのではないかと感じて「不利に働く」と答えた学生が四八・一%と半数近くに及び、「有利に働く」とした学生(一三・〇%)より圧倒的に多かった。「有利に働く」ととらえた学生は、「やりたいことがあり就職活動の出遅れを覚悟していたが周りの活動も遅れたので結果的に良かった」「周りの就職活動スタートが全体的に遅れた中で自分は早めに活動を開始している」という二つの回答が多かった。

特集 倫理憲章の改定を受けて

図3 6月1日時点での活動状況

(社)



(資料出所)ディスコ「2013年度 日経就職ナビ 就職活動モニター調査」(2012年6月)

三 最大の影響は二月の過ごし方

十二月になり企業の採用広報が開始されると、学生は精力的に活動を開始した。開始後の十二月

直後の十二月上旬がエントリーのピークとなり、十二月の一月月間でのエントリー

平均社数は四六・九社で、一時期に集中したと言える。

また、企業セミナーへの参加ピークは、

例年同様「一月下旬から二月下旬」とな

っており、企業へのエントリー時期とセミナー参加のピークまでの時間がかかなり短くなったと言える。一方で、企業側も学生への情報提供不足を懸念し、自社セミナーの開催数や定員枠を増やすケースが多数見られた。スマートフォン

の普及もあり、インターネットを通じて企業のセミナー予約をしようにも満杯でなかなか予約がとれないというケースが減った結果、学生の企業セミナー参加へのハードルは下がった。そういった背景もあって、エントリー社数は昨年度比一割減で推移しているが、学生のセミナー参加数やエントリーシート提出数の平均は昨年とほぼ同数となっている(図3)。

しかしその時期は後期試験もあり、大手企業を中心とするエントリーシート締め切りと重なった。採用活動期間短縮のしわ寄せがこの時期に集中したわけだ。五月末までに就職活動を終えた学生モニターのほとんどが、「面接が一日に何社も重なった四月」よりも「二月のセミナーピーク時」が最も忙しくきつかったと回答している。「二月はセミナーに行かなかつた日が四日しかない」(文系男子)、「セミナーに三社参加し、夜はエントリーシート作成。二月の平均睡眠時間は四時間未満」(文系女子)などの声に代表されるように、二月から三月上旬にかけてはかなりの時間を費やして活動を行っていたようだ。このことが、学生にとって最も大きな影響であったことがうかがわれる。

四 企業は学生の理解不足を実感

二〇一二年五月下旬の企業調査を見ると、実際に面接などを通じて学生と接点をもった感想として、多くの企業が「理解不足の学生が増えた」と回答している。この傾向は大手企業ほど強く表れている(52ページ図4-5)。

内定者に対する満足度については、「質・量ともに満足」が昨年対比で大きく減っている。採用マーケットは回復傾向にあり、企業の満足度低下が、どの程度採用広報期間短縮による影響かは判断が難しいが、「広報活動期間が短くなった影響で学生の仕事・会社への理解が低いと感じた」(建設)のように、期間短縮が原因と考えている企業が多い。

学生モニターが就職先を決めた理由を見ると、やはりその影響を感じる。「仕事内容が魅力的」「職場の雰囲気が良い」「希望の職種につける」など、じっくり企業研究することで理解できる項目の割合が減り、「有名企業である」「大企業である」「業界順位が高い」「将来性がある」など、表面的に判断できる項目の割合が増加している(53ページ表1)。短期間での情報収集を余儀なくされた学生は、まず業界順位や知名度を参考に企業研究し、精力的にセミナーに参加、面接へと進んでいった姿がうかがえる。

就職先を決めた学生モニターと直接会話すると、早期に大手企業に内定を得た学生にある共通点を感じる。今年採用広報期間の短縮化を受けて、四月上旬に大手企業を中心に選考面接が集中した。その中で、選考ピーク前に志望業界を絞り、さらに志望企業の順位をしっかりと決めて選考に臨んだ学生が内定を得ているケースが多いのである。面接スケジュールの立て方や、面接日時が重なった際の判断スピードなど、過密スケジュールの中で効率的に活動した学生が成功していると言える。大手企業を中心に、今年度は同業他社とのバツティングが目立って多く、内定後は即日で学生から承諾の返事をもたらえるというコメントもよく聞く。

二〇一二年六月上旬の学生モニター調査で、企業の採用広報開始が二カ月遅れたことによる自身への影響は実際にどう働いたか尋ねた。「どちらかといえば有利に働いた」が二〇・〇%に対し、「どちらかといえば不利に働いた」が二九・〇%、「どちらともいえない」が五一・〇%を占めた。内定の有無で見ると、内定をもっている学生は「どちらかといえば有利に働いた」が二八・〇%で、「どちらかといえば不利に働いた」が二四・六%と、有利に働いたという感想が多い。

「陸上競技をやっているから、これより早いと秋シーズンに集中して取り組めなくなるから、シーズンが終わったこの時期がよかった」(文系男子)、「短期間で選考が進むため、